

## 発掘調査の概要

### 日高山瓦窯の調査（飛鳥藤原第213次）

日高山瓦窯は、藤原宮の瓦を生産した瓦窯です。藤原宮に瓦を供給した瓦窯は奈良盆地内だけでなく、西は香川県から東は滋賀県まで広く存在します。なかでも日高山瓦窯は藤原宮南門から約300mという藤原宮にもっとも近い位置につくられました。これまでの調査・研究から、日高山瓦窯で焼かれた瓦は藤原宮をめぐる大垣（掘立柱塀）を中心に供給されたこと、藤原宮の造営過程の中でも比較的初期に操業した瓦窯であることなどがあきらかになっています。今回、日高山瓦窯の範囲と瓦窯の詳細な構造をあきらかにするための発掘調査を実施しました。調査は5月15日から開始し、現在も継続中です。調査地は現在、日高山児童公園として管理されている日高山丘陵の北端にあたり、調査面積は201.6㎡です。調査の結果、1960・70年代の調査で確認されていた3基の窯にくわえ、新たに3基の窯を発掘し、合計6基の窯の存在があきらかになりました。

日高山瓦窯の最大の特徴は、<sup>あながま</sup>窖窯と<sup>ひらがま</sup>平窯という2種類の構造の窯が共存することです。窖窯は製品となる瓦を置く場所（焼成部）を傾斜させる構造の窯で、瓦づくりが日本に伝わった6世紀末以来使用されてきた、従来型の窯です。平窯は焼成部を平坦にした構造の窯で、窯の壁面の構築材に<sup>ひばし</sup>日乾レンガ（日光で乾燥させたレンガ）を使用することが特徴です。現状、平窯の瓦窯は日高山瓦窯のものが日本最古であり、当時新たに導入された新型の窯といえます。今回検出した6基の窯のうち、1・5・6号窯が窖窯で、2・3・4号窯が平窯です。特に5号

窯の構造は特徴的で、焼成部が傾斜をもつことから窖窯に分類できるものの、窯の構築材に日乾レンガを使用しており、杓子形の平面形も平窯である2・4号窯に近いものでした。つまり、従来型の窖窯と新型の平窯の両方の要素を備えた窯だったのです。このほかにも、窖窯の1・6号窯の一部に日乾レンガを使用するなど、いずれの窯も少なからず折衷的な様相をもっています。平窯導入期における瓦窯の操業実態を示す、重要な成果といえます。

日本初の瓦葺き宮殿の造営という大事業は、寺院造営とは桁違いの量の瓦を必要としました。平窯はそうした瓦の大量需要に応えるために導入された新技術と考えられます。しかし、この段階で日高山瓦窯以外に平窯が広く普及することはありませんでした。新技術は得てして使いにくいものですが、平窯の導入も決して一筋縄ではなかったのかもしれませんが、日高山瓦窯における窖窯と平窯の折衷的な窯構造は、未曾有の大事業に直面した当時の瓦工人の試行錯誤を反映しているかのようです。

日高山瓦窯の平窯に近い構造の瓦窯は中国に類例があり、その導入について中国との関連がうかがえます。しかし、当時は遣唐使の派遣が滞っていた時期にあたり、導入のルートと契機を単純に理解することは困難です。調査は現在も進行中であり、新知見も得られつつあります。調査終了後は、出土瓦の分析はもちろん、中国・朝鮮半島の瓦窯を含めた瓦窯構造の比較検討を進めることで、瓦づくりを介した古代東アジアにおける技術交流の実態をあきらかにしていきたいと考えています。今後の研究成果にご期待ください。

（都城発掘調査部 道上 祥武）



1号窯（窖窯、西から）



4号窯（平窯、北から）